

霞提(中条堤)とピラミッド

村史研究会の会合の中で教えてもらった「霞提」、中条堤の事ですが、最近読んだ本「日本の謎は地形で解ける(竹村公太郎著)」で、関連するようなことを見つけました。その題名は、日本の謎と書いていますが、エジプトの「ピラミッド」のことも書いてありました。下記は竹村公太郎氏の本の内容を抜書きしました。

●王墓説

吉村名誉教授はじめ大多数の研究者によって否定されている。王家の墓は別の場所で発見されており、ピラミッドを王家の墓とするには矛盾だらけである。

●日時計説, 穀物倉庫説, 宗教儀式神殿説, 天体観測施設説

●農民救済の公共事業説(1974年、ドイツの考古学者メンデルズゾーンが提唱)

この説は「ピラミッドには具体的な目的はない。ただ、農民を救う景気対策である。洪水氾濫期に農民を救済しないと風紀が乱れ、王朝体制が揺らいでしまうからだ」というもの

ピラミッド群の主たるものは、発見されただけでも80基以上となり、未だ発見されていないものを含めると100基に及ぶ。そして、その約100基のピラミッド群は、全てナイル川の西岸に位置しているのだ。2008年にも、最新のピラミッドが砂の中から1基発掘された。これもナイルの西岸に位置している。この配列にこだわった視覚デザイン学の高津道昭筑波大学教授は「ピラミッドはテトラポット」であったと推理し、1992年に「ピラミッドはなぜつくられたか」(新潮選書)を出版した。この説は、視覚デザインという思いもかけない観点からの展開であった。ただし、高津教授は土木の専門家ではないため、テトラポットや霞提(かすみてい)という用語で説明しているが土木工学的には不明確になっている。私は高津教授の説に賛同し、河川技術の専門家としてこの説を補強していく。つまり、あのピラミッド群は「からみ」であったのだ

としています。

それから、「ナイル川西岸の謎」として、ナイル川西岸のピラミッド群の分布(左は調べたネット上の情報、右側のピンのマークはGoogle_earthで調べた標高です)



ピラミッド群は、ナイル川西岸(左岸)だけに配置されており、これを竹村公太郎氏は「搦(からみ)」と見ていますが、「搦(からみ)」は「縄が木に絡みつくと意味で、堤防予定地に松丸太の杭を打ち込み、粗朶や竹などを絡みつけて、ガタ土が付着して堆積するのを待ち、茅や葦が生え地盤が高くなった時点で突き固めて堤防を築いたと言われている」ようで、昔の日本でも有明海の干拓に使われた手法のようです。

そういわれると、そのようにも思えますが、日本の中条堤のように、海の中でないことが違います。海の干潟では潮の満ち引きを利用し、杭の周りに土砂を溜めますが、ピラミッドはナイル川の氾濫した水をピラミッドを越して逃すことでナイルの水路を変えず下流域を洪水から守り、中条堤は本流の水位で自動的に氾濫した水を溜めたり、放流したりしてダム役割を果たし下流を洪水から守ります。

ピラミッドは、洪水の際にナイル川西側(左岸)のピラミッド群や流域内の東側(右岸)の高台下まで水で溢れ、溢れた水はピラミッドとピラミッドの間から西側へ流れ出したと思われませんが、その水が砂漠の砂の中に消えていくことも計算内であったように思います。土砂を含む水の流れをピラミッド群に当てることによって水の流速を遅くさせ、ピラミッドの周りに土砂を沈積させて、「からみ」と同じような堤防を築く効果も得られたかもしれませんが、それは目的でなかったと思います。漏れ出さない堤防をつくってしまえば、下流域での大水害が起こることになります。このピラミッドはそれを防ぐ中条堤と同じような、霞堤であったように考えます。

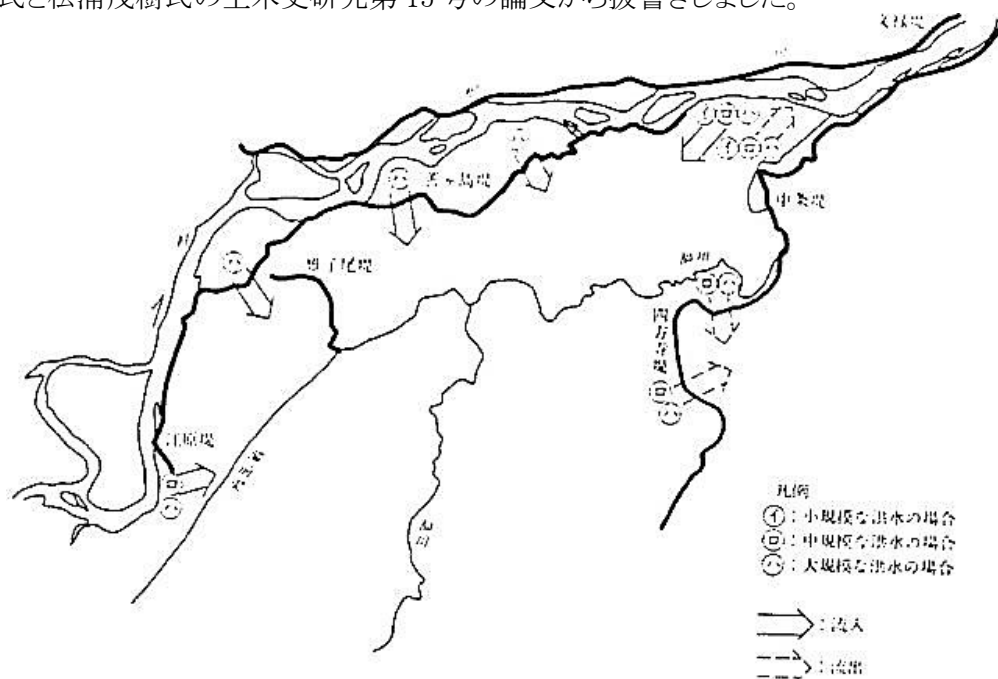
中条堤では、利根川河川敷内は水浸しとなり、また、堤の上方の田地も同じように冠水状態となりますが、本流の水が引けば、堤の上側に残った水も元の利根川に戻っていき、中条堤の下方は水から守られたこととなります。この時には一期分の稲の収穫はできなかったと思いますが、肥えた土砂が堆積して、その後は米の収穫量が上がったと思われます。

竹村公太郎氏は堤防を造ることを目的としたと考えていますが、それでは下流域の洪水は防止できず、高津道昭氏の考えたように、ピラミッドの目的は、ナイル川の流路を西側の砂漠の中に変えたくないは、あったかもしれませんが、ピラミッドにより水が越しても良い自然堤防のようなものを造って、昔からの流れの下流のナイルデルタの方の洪水を防ぐことと、流路を保ってナイル川の水運とデルタの干拓に必要な土砂も運ばせるための治水であったと考えます。

* 中条堤について「利根川近代治水計画における中条堤上流部の位置付け」

https://www.jstage.jst.go.jp/article/journalhs1990/15/0/15_0_129/_pdf

小坂忠氏と松浦茂樹氏の土木史研究第15号の論文から抜書きました。



中条堤を境にしての相違は、源頼朝による鎌倉幕府の創設に活躍し、それを支えた関東武士団の居住地からも判断される。中条堤下流には、中条氏、河原氏、成田氏などがみられるが、その上流には妻沼町付近の長井荘に斎藤実盛がみられるのみである。この相違は、利根川氾濫に対しての違いと考えられる。つまり中条堤が、あるいはその前身が、古墳時代といわなくても古代の末期には整備されていたと考えられるのである。それは**自然堤防**を巧みに利用して造られていったと思われる。記録として明文化されたものとして、鎌倉中期の1252(建長4年)に中条堤の一部である「**水越**」の地名が文書に記されていることを、「新編武蔵風土記稿」[1826(文政9年)]は述べている。また中条堤の連続としてある**柿沼堤**が、1232(貞永元年)、大破したとの記録が東鑑にある。中条堤は、この後、戦国時代にかけて中条堤下流の**忍城**(行田市)を根拠地とした行田氏によって少しずつ整備され、1590(天正18年)の徳川家康の関東入国となった。家康は、北の守りとして忍城を重視し、一門の家忠、暫くして第4子の松平忠吉を封じた。また天領の統治には、関東郡代伊奈忠次があたったが、中条堤は彼によって築造されたとの説がある。しかし彼の行ったのは戦国末期、戦乱のため荒廃した中条堤の復旧と考えられる。その後、次第に中条堤は増強されていった。

この記述の中に「柿沼堤」が見えますが、東鑑(吾妻鏡)の中では、「**樽沼**(せんぬま?)**堤***1」となっているようで、**横沼**の誤記として越辺川と都幾川が合流する埼玉県坂戸市赤尾辺りを**樽沼**(くれぬま)堤に比定する見方もあるようです。

*1:漢字辞典のJIS第2水準で、「樽」は「くれ」との読みがあるが、「樽」は「たん、せん」の音読みしかなく、意味は「ひつぎ車、まるい」しか見えない。

吾妻鏡では、

寛喜四年(1232)二月大廿六日丁丑。武蔵國樽沼堤大破之間。可令修固之由。可被仰便宜地頭之旨被定。左近入道々然。石原源八経景等爲奉行下向。彼國諸人領内百姓不漏一人可催具。在家別俵二可充之者。自三月五日始之。自身行向其所。可致沙汰之旨。含命云々。

「左近入道道然と石原源八経景を奉行と為し下向、武蔵国の諸人は領内の百姓一人も漏れなく具を催し、在家別に俵二枚を割り当てるので、三月五日より之を始め、奉行自身が其の所に向い沙汰すべしの旨、命含める。」

この書かれた内容からすると、人名の「石原」は関係があったのか不明ですが、堤の下流の武蔵国全体に広がるような大きな水害であったと考えられ、この頃の利根川であった可能性の方が高いと考えられます。下図は、現在の地図で上側の青いルートの高さを表したのが下の図ですが、越辺



川と都幾川の堤が決壊しても、東側の標高が10mも高く、大宮や春日部等への被害は無かったかと思われます。これらから考えると、「樽沼堤」は中条堤の連続で四方寺堤に続いていてあったと思われる「柿沼堤」だったように思われます。

逃した水も元に戻す中条堤、そのまま砂漠に消すピラミッド、年代と考え方は違いますが、下流域を洪水から守る「水が越しても良い」の「**震堤**」の発想は同じで、素晴らしい知恵と思いました。

「クフ王のピラミッド」より: <http://www.middle-egypt-travel-association.org/private/33g1.html>



1900年に撮影された写真。
ピラミッドの東側から撮影されている。
この当時、ナイル川の氾濫時期、ピラミッド付近まで川の水が来ていたことがわかる。

ナイル川の氾濫(1920年)より: <http://bigface-egypt.way-nifty.com/photos/1920/photo41.html>

